

みなさんの手で、国蝶 オオムラサキを増やしませんか

谷戸沢廃棄物広域処分場発

準絶滅危惧種 オオムラサキの生態を考慮した保護の手法について

1957年、日本昆虫学会でオオムラサキは国蝶として選ばれました。これは国内でも広く存在し美しかったためです。しかし、現在では2006年の環境省レッドリストで準絶滅危惧種として指定されています。

このオオムラサキは乱獲により減少したというのではなく、住宅開発などにより、里山が減少したことで少なくなったといわれています。

幼虫はエノキ（エゾエノキ）の葉を食べ、成虫はカブトムシなどと同じようにクヌギ、コナラ（ミズナラ）などの樹液を飲みます。多摩地域ではクヌギ、コナラは広く存在が確認されており、エノキについても明るい林縁や公園等で容易に確認することができます。それではなぜ、オオムラサキは減少したのでしょうか。

オオムラサキは冬の間、幼虫のままエノキの根元に下りてきて、葉の裏で越冬（冬眠）します。この越冬幼虫が付いた葉が風で吹き飛んだり、清掃などで掃かれたりすることで、幼虫の多くが春にエノキに戻れなかったものと考えられます。

このようなことが生じないようにするため、エノキの根元に柵を設けて落ち葉が飛ばないようにするだけで、循環組合のオオムラサキは簡単に増加させることができました。一度この柵を設置してしまえば壊れるまでそれ以外のメンテナンス費用の発生もありません。雑木の減少というのも一つの原因ですが、オオムラサキの生態を知ることで減少を防ぐどころか、増加させることも十分可能なことが循環組合の取組からわかりました。

オオムラサキの幼虫はヤマガラ、シジュウカラなどの小鳥類などへのえさの供給源ともなり、豊かな生態系の確立にも役立ちます。

是非、この機会に当組合が実証した費用負担の少ない手法を活用し、みなさんの手でオオムラサキを増やしていきませんか。

オオムラサキ生態について



■ 6～8月 成虫での飛翔、大きなエノキの木に産卵を行う



一齢幼虫（頭の角がない状態）

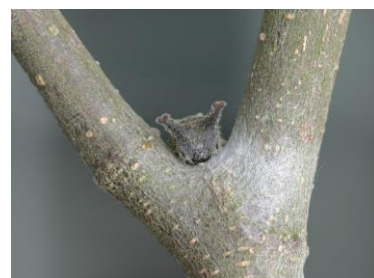
■ 8～12月 幼虫で3回程度脱皮する。

■ 12月～4月 エノキの根元で幼虫の姿で越冬する



越冬中の幼虫

■ 4～6月 エノキに上り、成虫になるための準備を行う



エノキに登り始めた幼虫

■ 6～7月 サナギになり羽化する

